

めでいかすどる  
*Médicastre*



「月 山」

鶴岡地区医師会

19年 12月号

『 動脈硬化性疾患の発症機序と予防対策  
(臨床エビデンスを含めて) 』

東京大学大学院医学系研究科 先端臨床医学開発講座

准教授 佐田政隆先生

不安定狭心症や急性心筋梗塞といった急性冠症候群の原因として、「プラークの破綻」が注目されている。破綻したプラークでは、脂質コアの増大、被膜の菲薄化、平滑筋細胞数の減少、凝固能の亢進、コラーゲン含有量の減少、炎症細胞浸潤、プロテアーゼの発現亢進、病変内血管新生などが認められる。しかし、このようなプラークの脆弱化がどのようにしておこるのか、どのようにして予知できるのか、どのようにして予防できるのかなどに関して不明な点が多い。

一方、魚の摂取量が多い民族では心筋梗塞の発症率が低いことが以前から知られている。また、EPAはDHAといった $\omega$ -3多価不飽和脂肪酸( $\omega$ -3PUFA)の摂取が心血管系イベントを有意に抑制することが臨床試験で確認されている。注目すべきことには、 $\omega$ -3PUFA投与の治療効果は比較的短期間で認められる。高脂血症患者を対象にして日本で行われたJELIS試験においても、スタチンの基本的処方に高純度EPA製剤を上乗せすることで冠動脈イベントの発症が19%も低下することが報告された。しかし、このような臨床エビデンスを裏付けするために、 $\omega$ -3PUFAの作用機序が十分に解明されているとはいえない。

本講演においては、動脈硬化の進展と破綻に関する最新の知見を照会する。特に、高度動脈硬化病変において内皮細胞や平滑筋細胞のアポトーシスが頻回に生じており血管内外の前駆細胞によって置換されている点、外膜やプラーク内新生血管を介する外来細胞浸潤や微小出血がプラークの進展と性状決定に重要な役割を担っ

ている点を紹介する。そのうえで、経口摂取した $\omega$ -3PUFAが資質メディエーターや転写因子に作用することで、プラークの進展や不安定化を抑制する機序を平易に解説する。

最近、多くの危険因子を併発した患者が増加している一方で、生活習慣病に対する薬物が各種開発されている。このような状況下、心血管系イベントの発症をより効果的に抑制するために、内科的な治療にどのように取り組めばよいかについて考察したい。

日時：平成19年11月25日(日)  
場所：酒田地区医師会

## 第26回庄内医師集談会に参加して

中村秀幸

11月25日(日)に、恒例の庄内医師集談会が酒田で開催されました。今年で26回を迎えます。あいにく連休の最終日とあって都合のつかない先生方も多かったようです。また、この日は、「がん情報センター」研究プロジェクトの一環で、慶応義塾大学の生命科学研究所のなかにがん情報ステーションを設立することになり、その一環としての記念シンポジウム「患者、家族、市民をサポートするがん情報とは？」が重なってしまいました。中目会長もシンポジストとして参加されました。当初、集談会への発表の先生もいらしたとのことで残念でした。

集談会は、一般演題のみの22演題でした。各科にほどよく配分され、内容も、本来の集談会の趣旨にそった、身近で地域性のある、実地の診療に直結するものでした。各科の会員が一同にすることもあり、噛み砕かれた非常に分かりやすい発表でした。10枚のスライドの枚数制限は遵守が難しいようで、オーバーする先生が多かったですが、充実した活発な討議が行われたため、それほど苦痛には感じませんでした。

比較的徐脈と呼吸器症状を欠いたレジオネラ肺炎の症例、小児のエルシニア腸炎、腹腔鏡下で診断された結核性腹膜炎、トピックである脳梗塞超急性期の血栓溶解療法や非アルコール性脂肪性肝炎(NASH)など興味のある発表があいつぎました。ムカデの咬症や抑うつを伴う身体不定愁訴に対する改良型通電療法などは、他科のトピックを聞けるこの集談会ならではの演題でした。抄録は、県の学術広報誌に掲載の予定です。

また最近では、いわゆる症例の検討のみならず、長期入院時患者の検討や、病院での在宅医療の取り組み、開業医の末期がんへの取り組み、いわゆる孤独死といわれる独居高齢者の分析など、地域

の医療を考える上での参考となる問題提起もあり、内容が幅広くいっそう充実したものとなりました。

本間会長、学術担当の佐藤顕理事はじめ、関係者のご尽力に敬意を表します。

ただ、日程として、連休にあたる日が多く、この点は、1週早めるなどの案を考えておりますが、集談会の協議事項として皆様方よりご検討をお願いしたいと思います。

来年度は、当地区の当番で、11月30日(日)です。来年はちょうど連休から外れています。テーマを持ったものにするか、シンポジウム形式を取り入れるか、現在進行中の「庄内プロジェクト」を何らかの形で取り入れていくか、今後内容を詰めていきたいと考えています。

例年ですと、この日は季節風が吹きすさび吹雪もようなのですが、久しぶりの秋晴れに恵まれ、懇親会では、きれいな満月を眺めることができました。

日時 平成19年11月15日(木)

場所 医師会3階講堂

## 第49回鶴岡准看護学院戴帽式

教務 斎藤真理子



11月15日(木)、第49回生の戴帽式が来賓・保護者方の出席のもと、厳粛に行われました。入学時の25名が、全員そろってこの日を迎えることができましたことはとても喜ばしいことです。

来賓の方より頂いたお祝いの言葉や今日の感激を胸に刻み、これから進んでいく看護の道への決意を新たにし、心の灯を絶やすことのない

よう皆が力強く歩いていってほしいと願っています。この約半年間で少し成長した学生たちが、これから始まる臨地実習を通し、更に成長してくれることを期待したいと思います。

### < 今野 加奈 >

入学してから約6ヶ月が過ぎ、憧れのナースキャップを戴き、ナイチンゲール像から分火された灯を手にしてナイチンゲール誓詞を唱和しました。戴帽式はとても緊張しました。多くの出席者の方を前にしてナースキャップを身につけることに、緊張と不安でいっぱいでした。

これから先、苦しいことも悲しいことも悩むことも、いろいろあると思いますが、今日の感激を忘れずに頑張っていこうと思いました。

ナースキャップをつけて初めての実習が始まります。一つでも多くのことを学べるようにがんばります。

### < 貝 沼 英 子 >

戴帽式を無事に終え、ナースキャップを戴き、灯を手にしてナイチンゲール誓詞を唱和した時は、感動とこれから始まる実習に対する決意が生まれました。

いよいよ実習が始まります。患者さんへの対応や援助を行うことで不安もありますが、喜びを感じることもきっとあると思います。事前学習をしっかりとし、先輩を見習い、多くのことを学んで吸収していきたいです。

そして、25人全員で今日の日を迎えられたことを嬉しく思います。クラスメートと協力することは大切ですが、個々の努力や学習が自分自身の成長につながると思います。時には助けたり助け合ったり、励ましあっていきたいです。実習は体力勝負です。健康管理をしっかりとし、最後まで諦めず乗り越えていきたいです。



## 故 佐藤克巳先生のご冥福をお祈り申し上げます。

平成 19 年 11 月 8 日午後 11 時 45 分死亡 享年 86 年

### 弔辞（佐藤克巳先生）

謹んで鶴岡地区医師会会員 故佐藤克巳先生のご霊前に弔辞を捧げ、医師会を代表し、深く哀悼の意を表します。

先生は、体調をお崩しになられるも、一時は元気になりつつあるという情報をお聞きし、その後のご容態を案じながらも回復を期待しておりました。

しかし、さる 8 月 11 時 45 分にも忽然と永眠されたという悲報を、出張先である富山市において、事務局から連絡を受けました。その時、しばらく呆然としたのち、深い悲しみにおそわれました。それは、私どもが優れた先達を失ったからです。当地域医療界にとりましても悲しみは大きく、またご家族・ご親戚の方々におかれましても、通惜の念はいかばかりかとお推察いたします。

医師会員、職員一同心からご冥福をお祈り申し上げます。

顧みますと先生は、昭和 22 年に新潟大学をご卒業された後、同大学整形外科教室に 11 年間勤務なされ、昭和 29 年に鶴岡市立荘内病院に赴任。整形外科医長並びに副院長として 10 年 6 ヶ月奉職され、外科医として救急医療の最前線で活躍されました。

荘内病院を昭和 40 年に勇退された後は、当初、宝町に一時開業されましたが、まもなく現在地に移り、以後平成 17 年 3 月までに 40 年間を開業医として地域医療に貢献されました。

また、鶴岡地区医師会においては、荘内病院の副院長の時代から当会の理事として迎えられたことに始まり、通算して理事 2 年、副議長 8 年、副会長 10 年、会長職 7 年という大役を果たされ、さらに会長職を退任されてからは今日まで顧問をお引き受けいただき、医師会の各種行事に機会あるごとに参加していただき、当会の発展と地域医療の発展のために貢献していただきました。

この間、救急医療の功労者として、平成 3 年に山形県知事表彰、平成 6 年には厚生大臣表彰という名誉を授かっております。

このように先生が長い間にわたり、当医師会に関わってこられたのも、ひとえに、先生の医師会に対する厚い情熱と志が会員に伝わり、また、先生の温厚、かつ、極めて篤実・高潔なお人柄が囑望せられ、今日に至ったものと思われます。

特に、副会長を引き受けられた昭和 54 年以降の時代は、全国的にも脚光を浴びた健康管理センターの新設が検討され、最も活力に満ちた時代であり、先生は池田勤会長のもとで、会長を支えながら健康管理センターの建設や成人病予防対策に真摯に取り組まれ、また休日夜間診療所を開始することでも各地に奔走され、ご奮闘なされました。先生のご活躍された分野を拝見しますと、医師会の事業運営のみならず、各種、関係団体との連携強化に、つながるものが数多く、市役所や保健所などの行政機関、消防、警察などと一体となって、研修事業の実施や救急救命に関する講習会などが行われ、市民の意識啓発の向上と鶴岡地区における地域医療体制の整備・充実に多大な功績を残されました。

先生の信念、指導力、信望をもって成し遂げられた、数々のご功績につきまして、ここに改めて心から感謝お敬意を表します。

先生が、平成元年に会長になられたとき、私に役員をやってくれないかというお誘いの電話をくれました。今以上に浅学非才の私は、医師会活動には興味がないとか、ゴルフや麻雀で忙しいなどとならべたてて、お断りしました。ところが、2年後の平成3年に、先生はふたたび私に役員招聘の電話をくれました。

二度も電話を頂いてお断りすることは、失礼にあたると思い、学術担当ならお引き受けしますと行って、承諾しました。理事になって数ヶ月たったころ、先生は、「うちの医師会には広報誌がないんだよね、学術部でつくってくれないか」という要望を言ってきました。半年間の準備をして、広報誌めでいかすとるを平成4年の5月に第1号を創刊しました。先生に理事会の席でお見せしましたら、「よくやった。ずっと続けてくれよ」と言って、丸い顔をさらに丸くして、何度も手にとっては表紙をめくり、事のほか喜んでくれました。広報誌めでいかすとるは今年で15年目になります。二年越しの二度にわたる先生の役員への勧誘のお言葉がなければ、現在の私はありません。私の人生を大きく変えたのが、克巳先生なのです。私は、先生のご恩にお答えしなければなりません。

私どもは、これまで鶴岡地区医師会が築きあげてきた伝統を守り、諸先輩のご薫陶とご遺志を受け継ぎ、さらなる発展を続けていく決意であります。

先生、どうぞ私どもを、これまで以上に見守ってください。先生の80余年の人生は、鶴岡地区医師会の歴史そのものであるからです。

本日のご葬儀に当たり、先生のご逝去を悼み、また、生前の輝かしいご功績とご遺徳を偲び、心からご冥福をお祈り申し上げ、お別れの言葉とします。

どうぞ、先生、安らかに眠り下さい。

平成19年11月12日

鶴岡地区医師会

会長 中目千之

新潟大学医学部学士会、荘内支部並びに荘内整形外科医会の代表として、弔辞を捧げさせて戴きます。

佐藤克巳先生、今ここで静かにお休みになられている先生を見て、この様な慈愛に満ちたお顔の写真を前に、永遠のお別れの言葉を申し上げます。“生きるものは、必ず滅ぶ”ことは、われわれ誰もがわかっている心算です。

しかし、今、この場に居るということが、如何に冷酷なものか、できれば夢であって欲しいと、未練に満ちた思いが悲しみの周りを駆け巡り、ただ茫然と私はここに立っているのです。だが、先生をお送りせねばなりません。そして、私共が長いお付き合いをさせて戴いた日々の事を思い出しております。

先生は、昭和23年に新潟医科大学整形外科教室に入局され研鑽を積まれましたことは教室誌に記載されております。その後、昭和29年、その前に少しの間着任されておられた福原先生のあとを引き継がれ、荘内病院整形外科医長として鶴岡に来られました。ここで、当時まだ黎明期であった近代整形外科の種をお撒きになって下さいました。その種は年々新芽となり、先生のお育てになった多くの若芽は、やがて大木へと育って参りました。私もそうした芽の一つであったと自負しております。昭和31年、

研修2年目の大切な1年間、親しく先生の教えを受けました。当時はダム建設の真最中で、毎日、土木工場の現場からの怪我人で病室は溢れておりました。医師としての姿勢をはじめ、診断書の書き方なども、私は今も、当時教えていただいた通り続けております。

士学整形外科教室時代の野球の太鼓腹ピッチャー姿、荘内病院では昼食休み、医局におかれていたピリヤードで、腰を曲げ、腕を伸ばして撞棒を握り、白、赤の球を突く姿や、乾いた音など、今もはっきりと思い出されます。

その後、私が昭和40年に荘内病院に赴任した時は、先生は副院長を辞され、御開業された年でした。その10年後、私もこの地で開業させていただきましたが、何度も先生をお訪ねし、いろいろと御懇切に相談に乗って戴きました。

この間先生は、新潟士学学士会荘内支部長として、また鶴岡地区医師会長としての要職で私共を御指導下さいました。深く感謝申し上げるばかりです。

また奇しくも一昨年、11月10日は、教室開講90周年記念同窓会が新潟で行われ、先生と机を並べられたり親しくお付合いをいただいた方々も、東京や秋田などから遠路鶴岡まで先生を偲んでお別れに来ておられます。

御高齢になられても、つい2年程前までは、いつもお元気で毎晩のコップ2杯の日本酒は欠かせないと笑っておられました。最後にお話したのはついこの5月でした。人の世は無情なのでしょうか、いや虚空なのでしょうか。佐藤先生、この場でもう一度おたずねし、教えて戴いてよろしいでしょうか。

“先生は十分生きられたとお思いですか”と。“うん、そう思うよ”とその声が聞こえて来るようです。御立派な御家族にも見守られ、先生は私共の心の中にいつまでも映っていると思います。有難うございました。

安らかにお眠り下さい。

平成19年11月12日

諸 橋 政 楨

# 故 佐久間 弘昭先生のご冥福をお祈り申し上げます。

平成 19 年 11 月 23 日午後 4 時 45 分死亡 享年 71 年

## 弔辞

謹んで鶴岡地区医師会会員 故佐久間弘昭先生のご霊前に弔辞を捧げ、医師会を代表し、深く哀悼の意を表します。

先生は、本年春ころ体調をお崩しになられ、療養を続けられているとお聞きし、その後のご容態を案じながらも、ご回復を待ち望んでおりました。

しかし、木枯らしの吹く晩秋の去る 23 日、忽然と永眠されました。

つい先日は、温海の佐久間医院の文雄先生がご逝去されたばかりなのに、優れた先達を続いて失っていくことは、当地域医療界においても悲しみは大きく、またご家族・ご親戚の方々のご心情を察するに、余りあまるものがあります。

先生のお人柄やこれまでのご活躍を知る者にとっては、誠に痛惜の念に耐えないところであり、医師会会員、職員一同心からご冥福をお祈り申し上げます。

顧みますと先生は、昭和 35 年に日本大学医学部をご卒業され、同学部付属病院に入所し、実地研修を終了されると、直ちに翌年には山形市篠田総合病院産婦人科において診療業務に取り組み、同病院で 4 年 4 カ月ほど勤務された後、昭和 40 年 10 月に実家である櫛引村の佐久間医院に帰られ、以後 20 年 8 カ月にわたり佐久間医院を支えてまいりました。

桂医院として独立し開業されたのは昭和 61 年からであり、その後も、地域のため徹底して地域医療に取り組み、第一線で活躍されました。

特に、当地方においては医療機関の少ない環境の中で、診療科目は内科、小児科、婦人科、外科を標榜され、地域の方々から頼りとされ、厚い信頼を受けながら地域医療と保健衛生に多大な貢献をされてきました。

また、旧朝日村大網診療所の嘱託医や産業医、学校医なども引き受けられ、平成 11 年には学校保健功労者として、県学校保健連合会会長表彰を授かっております。さらに、当医師会においても健康管理センターの建設や各種健診業務においては、多大なご支援とご協力をいただき感謝しているところであります。

大網診療所にお勤めされていたころは、冬になると積雪のため、車での往来も自由にならず、吹雪の朝、医院を出ると、落合までは運転はできましたが、それから先の大網までは徒歩で通わなければならないという、つらいご苦労がありました。

また、真冬のある日、田麦俣で双子が出産したときですが、部落には適切な保育施設がなかったため、急遽ヘリコプターの派遣を要請し、市立荘内病院まで無事、移送を果たしていただいたということもありました。

先生の高潔なご性格や専門知識に裏打ちされた優れた識見をもって、住民の生命を守るという信念に、改めて敬意と感謝を申し上げます。

お聞きしますと先生は、お元気なころは他の先生方と一緒に海で船釣りをしたり、紅葉した山での



キノコ取り、あるいはマージャンをたしなむことがあったようで、また、子どもたちのために毎年春の節句になると、お一人で雛段を飾ることがお好きだったことなどをお聞きすると、ご家庭を大切にされていたお気持ちや、人に対する思いやりを察することができます。

近年は、旅行をするのが楽しみで、時にはご親戚の方々とお出かけになるということですが、今回は残念ながら、とうとう最後の旅立ちとなってしまいました。 まだ誰も訪れたことのない桃源郷の世界をごゆっくりご堪能ください。

最後に、本日のご葬儀に当たり、先生のご逝去を悼み、また生前の輝かしいご功績とご遺徳を偲び、心からご冥福をお祈り申し上げ、お別れの言葉といたします。

どうぞ、先生、安らかにお眠りください。

平成 19 年 12 月 1 日

鶴岡地区医師会

会 長 中 目 千 之

# マイペット&マイホビー

- 第50回 -

## 茶の湯に誘われて

堀内隆三

私は根っからの食いしんぼうだと思う。朝食をとりながら夕飯のことを考えるし、寝る前に朝食のメニューが決まらなると不安だ。どこ其処に美味しい店があると聴けばとんで行って自分の舌で確かめるし、畑を借りて見よう見まねで野菜を作り、料理にも手を出している。縁あって根を張ることになった庄内は、まさに奇跡の食糧貯蔵庫。深雪に閉ざされる冬から灼熱の夏まで、四季がまことにハッキリしており、それぞれに海山の旬の素材が沢山揃い踏みしている。上物の新鮮な魚が揃い、気さくな店主の“後藤魚屋”と、在来野菜も手に入る、愛嬌の良い姉妹がやっている羽黒産直“あねちゃ”は、私には無くてはならない旬の食材の店である。

五十路半ばさしかかった最近、以前のような飽食を体は求めなくなった。スローライフ食とでも言おうか、どこかの畑の片隅でそっと育てられた在来野菜や、魚のドンガラを、七輪でコトコト煮込むような料理が好きになってきた。生まれ故郷の信州で食べた慎ましやかな料理と昔の庄内人が食べていたであろう料理が、私の体の中でミックスして住み着いたようである。しかし、食事の好みの変化は年齢だけでなく、十年前に始めた茶の湯が微妙に影響しているのかもしれない。

茶の湯を始めたきっかけは、山に住む仙人のような画家が勧めてくれたこともあるし、医師として壁に突き当たり悶々としていたこともあったと思う。ある秋の日、緊張しながらはじめて師匠宅へお邪魔した。しかし、そこで出会った茶の湯は、思い描いていたものとは大きく異なっていた。まず教えられたのは、戸の開け閉めに、畳の歩き方、座り方、そしてお辞儀の仕方……。まとも

に正座し手を突いてお辞儀することなどなかった私には、何やら抵抗感が強くドット冷や汗が出てきた。さらに稽古が進むと、やれ茶碗を左右どちらの手で持つか、茶碗のどこを持つか、どちらに回すか、はたまた畳の何目に置くか・・・など、果てしない決まりごとを教えられたのである。期待していた侘び寂びや、“茶禅一味”の境地などどこにあるものか・・・、“後悔先に立たず”と落ち込んでしまった。禅の修行僧は、何日も門前に放り出されて入門の覚悟を確かめられるというが、私の情けない日々も、茶の湯に入るにあたって余計な奢りや高慢を砕くという、師匠の暖かい配慮であったろうと、後からしみじみ感じ入ったものである。

覚えの悪い自分を嘆きながら、何回も何回も間違いを繰り返して、それでも師匠は根気よく指導してくれた。そして、数年経ってやっと点前の所作を体が覚えるようになると、実に不思議なことであるが、七面倒くさく感じていた色々な所作が、“降った雨が川となって山から海へ流れていく”如く、自然で無駄がないものとして感じられたのである。

自宅を改築せねばならなくなった際、庭の片隅に小さな小さな茶室を拵えた。本を首っ引きに、素人設計で作った三畳台目の小間の茶室。決して自慢できるようなものではないが、適来庵（せきらいあん）と名づけて、自分の愛すべき隠れ家になっている。嬉しいことに、この茶室が出来たお陰でいろんな方が、ときには海外の方も、訪れてくれるようになった。最近是不恰好ながらも着物・袴を自分で着られるようになり、形だけはだんだん“茶人”らしくなってきたようだ。



ある。

それにしても、最近気づいたことがある。いろんな趣味に熱中してはすぐ飽きてしまう私が、突然『茶の湯を始める』と言い出したとき、なぜ妻が反対しなかったかである。亭主に茶の湯を習わせ、自分では決して手を出さない、これが私を“世話のかからない亭主”に仕立てる一番賢明な方法だと、妻はどうも知っていたらしい、ということである。

先日、ある流派の師匠格の先生をお招きし、“一客一亭の茶事”を行う機会を得た。妻は最初から“われ関せず”を貫いているので、全てを私ひとりで準備しなければならなかった。前日から懐石料理の下拵え、朝早く起きて金峰山中ノ宮へ清水汲み、庭・躰の掃除と茶室畳の乾拭き、軸と茶碗の準備、庭から椿・糸ススキ・野紺菊を採って花入れに活け、炭を熾し釜の湯相を整える、抹茶を篩で漉し茶入・棗にいれ、主菓子・干菓子の用意、土鍋で米炊き、庭に打ち水をし、最後ににじり口の戸を僅かに開け、客人の到来を待つ……。時間との戦いで準備した茶事。懐石で入った多少の酒の助けもあって、実に楽しいひと時を過ごすことが出来た。客人からも『一生忘れられない茶席』とお褒めの言葉を頂き、茶の湯の醍醐味に触れた一日であった。

紆余曲折しながらも、こうして何とか茶の湯を続けている。これは妻に内緒で買い集めた茶道具や愛すべき隠れ家が無駄にするのが痛ましかったばかりではない。茶の湯の時間だけは、騒々しい日常生活から離れ、心を真っ白にして“壺中之天”に遊ぶことが許されるからである。雑駁な性分の自分が多忙に押し流され、心がカラカラに干上がらないために、茶の湯は欠くことが出来ない“オアシス”であり、生きる“道しるべ”なので

さて世間はもう師走、この一年私の拙い文章にお付き合いいただいたことに感謝いたします。感謝ついでと言っては何ですが、いろいろな先生たちにおいしい店を教えていただきました。この場を借りて感謝申し上げるとともに、今月号は教えていただいたお店をご紹介しますと思います。

まずは湯の浜の林先生。手打ち蕎麦の『扇屋 弥五郎』さんを教えていただいた。俳優の地井武男さんも食べたというお店である。場所は湯の浜温泉の旅館『いさごや』さんの隣。2階に上がったお店の座敷からは、湯の浜の海辺がよく見える。昔ながらの街中の蕎麦屋で食べれるような素直で優しい味である。新しい蕎麦屋でよく見かける、材料にこだわりすぎ、力の入りすぎた蕎麦とは大違いである。面白いのは、席に着くとまずお茶といっしょに柿の種とピーナツの小袋が出される。ゆっくり海を眺めながらお茶と柿の種を食べてると、ちょうどなくなったころ蕎麦が運ばれてくるという寸法である。もちろん地井さんのサインが壁際に置いてある。

次は整形の黒羽根先生と内科の犬塚先生に教えていただいた中華ソバの『喜多川』さん。この味は、犬塚先生がおっしゃた飽きのこない味というのがもっとも的確な表現だろう。スープはあっさりしてるようだが、不思議と不満を感じさせないようなコクがある。いやコクというような強いものではなく、もっと微妙で繊細な旨味とでもいおうか。濃い味が好きな若者にはまだわからないような大人の味わいである。お店のオバチャンは注文を受けてから麺を麺箱から取り出し、腰を入れて揉んでは縮れを作る。この麺がスープとよく絡みとてもおいしい。チャーシューは腿のロース肉で、棒状に切られてくるのがユニーク。しっかりと醤油の味が滲みている。私も何度も通うようにな

った、まさに飽きのこない味である。

さて、もう一軒は藤島の石橋先生に教えていただいた原田食堂さん。高齢の親父さん一人でやっているようだ。年季の入った昔ながらの中華ソバ屋さんのように思ったが、ところがどっこい驚きの連続のお店であった。昔ながらの支那ソバ風の中華ソバを期待したが、それを見事に裏切る驚きの太麺。スープがまさに昔ながらの懐かしい味わいだから、そこに縮れの少ないどっしり太い麺が入っているのはかえって新鮮だった。実は食べる前から予兆はあった。親爺さんは、麺を熱湯に入れた後も数分経っても微動だにしない。茹で過ぎないかとこっちが心配になってきても動かない。あれ、もしかして眠ってるのかな、いやしかし目を開け鍋をじっと見てる。こんなことを思ってから、さらに数分してやっとなんか麺を上げた。正直、食べるのが心配だったが、出来上がりの中華ソバを見て納得した。この麺の太さなら、さもありなんという感じである。さらにチャーシューメンを注文した人は、その威容を見てもっと驚くだろう。直径は15cmはあろうかというチャーシューが5、6枚は乗っているだろうか。麺が見えないどころか、明らかにドンブリからはみ出している。麺に辿りつくまで、チャーシューの地層を掘り進める感じである。もちろん、お腹がいっぱい。原田食堂、恐るべしである。

最後に、こうしておいしいお店を教えてくださいました先生方、本当にありがとうございました。

## 表 紙

「 月 山 」

佐 藤 元 昭

2007年4月11日。櫛引のヤマザワ店駐車より月山を300mmのレンズにて撮影した数枚の内一枚で、本人は、桜と一緒にと思ったのですが、まだ開花しておらず残念でした。

～ 編 集 後 記 ～

伊藤 末志

えとの最後の年も終わろうとしています。1年の締めくくりの学会、研究会兼忘年会もそろそろ終わりと思われませんが皆様の肝臓は健康でしょうか。

私は、今年初めて医療マネジメント学会なるものを知り入会しました。全国学会のほかに山形地方会があり、東北連合会（12月8日、盛岡市で開催）があります。Managementを辞書で引くと「管理、経営、やりくり」などとなっていますから、診療所の医師にも大切な学会と思ったのですが学会員は勤務医と看護師、事務方がほとんどです。山形県の本学会理事にも診療所の医師は入っていません。病院内でのクリティカルパスの検討から始まった学会だからのようですが。この山形地方会が来年は庄内病院が主管で開催されるため、その準備が始まっています。シンポジウムのテーマを「地域連携パス」にしたいと考えていますが、それには早々と「地域連携パス研究会」を立ち上げた当地区医師会の協力が絶対に必要になります。アンケート調査などをご依頼することがあると思いますが宜しくご協力をお願いします。

前から、学会の行きかえりの電車内での読書が息抜きになっています。先日は、庄内の地をこよなく愛した免疫学者、多田富雄先生の「寡黙なる巨人」を読みました。突然、脳梗塞に倒れた医学者の衝撃と絶望から「再生」していく過程を自筆したもので、今年のお勧めの1冊になりました。多田先生は、現在の山形県教育委員長で、I g E発見者である石坂公成先生の弟子に当たります。以前、平田町に「点睛塾」なるものがあり、私も塾生の一人のときがありました。塾長が多田先生であり、そこで石坂先生の「I g E発見にまつわるエピソード」をお聞きした記憶がよみがえってきました。

来年はえとの始めの年です。何かまた新しいことが始まりそうな予感がします。皆様よいお年を。

編集委員：中村秀幸・伊藤末志・斎藤憲康・五十嵐裕・福原晶子・岡田恒人

発行所：社団法人鶴岡地区医師会 山形県鶴岡市馬場町1-34

TEL 0235-22-0136 FAX 0235-25-0772 E-mail tsurumed@mwnet.or.jp

URL <http://www.mwnet.or.jp/~tsurumed/>

印刷所：富士印刷株式会社 鶴岡市美咲町27-1 TEL 22-0936(代)